

作業療法だより(11)

平成19年12月

今回も当院作業療法が、日常生活において高次脳機能障害を有している患者様の検査として、用いる評価器具を紹介します。前回の11月号で高次脳機能障害とは、交通事故での頭部外傷や脳血管疾患(脳卒中など)により、脳損傷を経験した方が、記憶や注意、思考や言語などの知的な機能に障害を抱え、日常生活に支障をきたすと言うことを説明しました。

第2弾の今回は日常生活動作上(食事・更衣・移動など)で左側または右側を無視してしまう行動を検査する「行動性無視検査(BIT)日本版」を紹介します。

1. 半側空間無視とは・・・

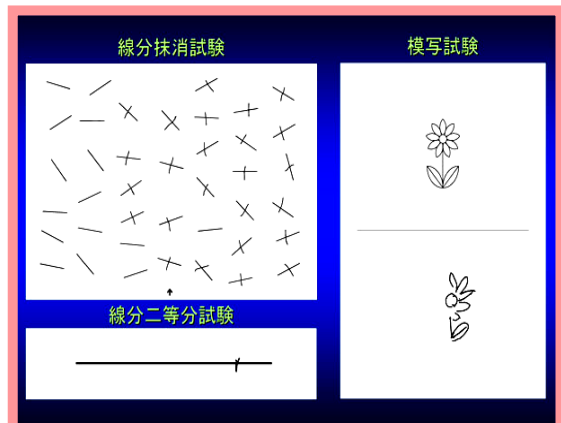
患者様ご自身が意識して見ている空間の半分(多くの方は左側)を見落としてしまうことで、社会復帰のための援助を行う上で、一番影響が大きいと言われています。症状としては、食事の際に体より左半分のおかずやご飯を残しているにも関わらず「すべて食べた」と認識してしまう。移動の際に左側の壁や置物に気が付かず、接触しながら進んでしまうといった状態を呈します。

その他の症状を例を右図に記載します。

- ① 顔がよく右を向く。
- ② 左側の人や置物に気付かない。
- ③ 車椅子の左側ブレーキの掛け忘れ
- ④ 衣服左側を忘れる(袖・襟など)
- ⑤ 髭剃りでの顔左側の剃り忘れ
- ⑥ 髪ときや歯磨きでの左側無視

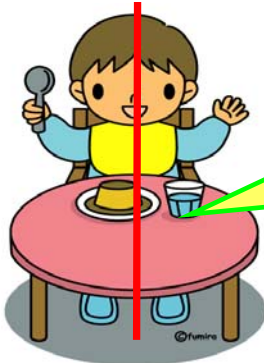
2. 半側空間無視の検査器具:行動性無視検査(BIT)

行動性無視検査日本版は、高齢者に適応可能なように作られており、また、健常人や脳損傷患者様の記録を元に、正常値と妥当性が確立されています。さらに行動性無視検査は従来の半側無視検査方法の集大成である「通常検査」と日常生活場面を模した「行動検査」の2つの検査からなる点が特徴です。この検査によって日常生活や訓練場面における半側空間無視発現の予測や訓練方法の選択を得ることが出来ます。また検査所要時間は約45分～50分で来院日数が1日だけで済むことも利点です。



※上写真は、検査の1例です。

3. 半側空間無視のリハビリテーション(訓練方法)



- ・動作時、左側への注意を繰り返し行う
- ・動作時、声を出して、手順を確認しながら行う
- ・空間全体の配置と、左側に注意を向ける作業(輪投げ通し・積み木・絵の模写や塗り絵など)
- ・作業療法士による治療的誘導

当院作業療法では、入院患者様では基本的な日常生活動作を、外来患者様では、日常生活動作から生活関連動作(主婦業・職場動作)などの訓練を行っています。